

## 化粧に関する研究 (第4報)

—大学生の化粧意識とそれを規定する個人差要因—

(2004年8月11日受理)

佛教大学大学院 平松 隆 円  
成安造形大学 牛田 聡 子

### Studies on Makeup

#### Part 4: Factors of Individual Difference in which Specifies University Students' Makeup Consciousness

Ryuen HIRAMATSU \*, Satoko USHIDA\*\*

\* *Graduate school of Education, Bukkyo University, Kyoto*

\*\* *Seian University of Art and Design, Shiga*

#### Abstract

In order to solve the factors of individual difference which specifies university students' makeup-consciousness, questionnaire paper investigation was conducted for 378 university students. Consequently, in male, it become clear that external others consciousness specifies "improvement in charm and feeling upsurge". By contrastsm in the female students, it has became clear that public self-consciousness specifies "improvement in charm and feeling upsurge", and external others consciousness specifies "improvement in charm and feeling upsurge" and "necessaries and appearance".

(Receives August 11 , 2004)

**Key words:** *makeup consciousness, self-consciousness, others-consciousness, sociak skill, sex roll.*

(Journal of the Japan Research Association for Textile End-Uses, Vol. 45, pp.847–854, 2004)

## 要 旨

大学生の化粧意識を規定する個人差要因を解明するため、大学生378名を対象に質問紙調査を行った。その結果、男性では、外的他者意識が『魅力向上・気分高揚』を規定し、女性では、公的自意識が『魅力向上・気分高揚』を規定し、外的他者意識が『魅力向上・気分高揚』『必需品・身だしなみ』を規定することが判明した。

### 1. 目 的

我々は、化粧に対して様々な目的や意識を持ち行動を行っている。

第3報では男女大学生を対象に、実際の化粧行動を規定する化粧意識の構造を明らかにするとともに、その構造に基づく彼らの化粧意識と化粧行動との関連性を検討した。えられた結果を要約すると、化粧意識として『魅力向上・気分高揚』『必需品・身だしなみ』『効果不安』の3因子が抽出され、これらの化粧意識と化粧行動とのあいだに男女ともいくつかの関連がみられた。例えば、男性では、顔ケアや保湿に関する化粧行動と『魅力向上・気分高揚』との、「頭皮クレンジング」といった他者から化粧を行っているか判別のしにくい化粧行動と『効果不安』との関連性が、他方、女性では、メイクアップに関する化粧行動と『魅力向上・気分高揚』『必需品・身だしなみ』『効果不安』との関連性が明らかとなった。これら化粧行動に関連する化粧意識の違いには、個人差要因の影響があると考えられる。

笹山・永松<sup>1)</sup>は、女性の化粧意識として、「必需品としての化粧」「身だしなみとしての化粧」「他人に見せるための化粧」の3因子を明らかにしたうえで個人差要因との関連を検討している。その結果、「必需品としての化粧」は自尊心や女性性の受容と正の、「身だしなみとしての化粧」は社会的外向性と正の、「他人に見せるための化粧」は男性性の受容と負の関連を示すことが明らかとなった。また、化粧行動と個人差要因との関連についての先行研究(大坊<sup>2)</sup>、松井<sup>3)</sup>、平松・牛田<sup>4)</sup>など)では、社会的スキルや自意識や性役割などが検討され、対人関係が円滑な者ほど化粧をよく行い、自意識に伴う外向性と内向性により化粧行動の程度が相違し、男性は男性性、女性は女性性が化粧関心や化粧行動

に影響することが明らかにされている。すなわち、個人差要因が化粧への意識や態度に影響を与え、さらにそれらが化粧行動に影響を及ぼすことが推測される。

本報では、第3報で明らかとなった化粧意識の構造をふまえ、男女大学生の化粧意識が社会的スキル、性役割、自意識、他者意識といった個人差要因によりいかに異なるかを検討する。

### 2. 調 査

#### 1) 調査時期、方法および被調査者

第3報と同一の調査データを用いた。調査は2003年12月に、関西にある複数の4年制大学の学生を対象に集合法により質問紙調査を行った。有効回答者数は378名(男子149名、女子229名)、平均年齢は男子20.12歳(SD=1.31)、女子19.59歳(SD=0.88)である。

#### 2) 化粧意識

第3報で化粧意識や態度に関する先行研究を参考にして、化粧意識に関する尺度を計34項目で作成した。そして、化粧意識に関する34項目それぞれに自己と同性同世代の化粧意識がどの程度あてはまるかを「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」までの5件法で回答させ得点化し、それぞれの評定点に基づき意識構造を明らかにするためにover-allの主成分分析(promax回転)を行った。その結果、「自分らしい化粧をしたい」「化粧はおしゃれの一部だと思う」「いろいろな化粧を試みたい」などからなる『魅力向上・気分高揚』、「化粧をせずに他人に見劣りしたくない」「化粧をしなくても平気だ(逆転項目)」「化粧のノリが悪いと一日中気分が悪い」などからなる『必需品・身だしなみ』、「化粧をする必要がない」「学生のうちは化粧をするべきではない」「化粧をしても効果がないと思う」などからなる『効果不安』の3因子が抽出

された。そして、それぞれの因子別に得点を算出し、以後の分析データとした。

### 3) 社会的スキル

菊池<sup>6)</sup>のKISS18を用いて「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」までの5件法で回答させ得点化した。

### 4) 性役割

東<sup>7) 8)</sup>によって邦訳されたBSRIから、社会的望ましさの尺度項目を省いた40項目を用いて「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」までの5件法で回答させた。その後、確認のため因子分析(主因子解・Varimax回転)を行い、既存の尺度である2因子を得た。内的整合性および因子構造の点から不適切な「危険を犯すことをいとわない」「個人主義である」「分析好き」「人に頼らず生きていけると思う」「明るい」「おだてにのりやすい」「言葉遣いがいい」「はにかみ屋である」「女性的である」「だまされやすい」の項目を除去し、男性性16項目、女性性14項目でそれぞれ得点化した。

### 5) 自意識

菅原<sup>9)</sup>の自意識尺度の21項目を用いて「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」までの5件法で回答させた。その後、確認のため因子分析(主因子解・Varimax回転)を行い、既存の尺度である2因子を得た。内的整合性および因子構造の点から不適切な「世間体など気にならない」「自分自身の内面のことにはあまり関心がない」の項目を除去し、公的自意識10項目、私的自意識9項目でそれぞれ得点化した。

### 6) 他者意識

辻<sup>10)</sup>の他者意識尺度の15項目を用いて「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」までの5件法で回答させた。その後、確認のため因子分析(主因子解・Varimax回転)を行い、既存の尺度である3因子を得た。内的整合性および因子構造の点から不適切な「人のことをあれこれ考えていることが多い」の項目を除去し、外的他者意識4項目、内的他者意識7項目、空想的他者意識3項目でそれぞれ得点化した。

### 7) デモグラフィック変数

被調査者の性別と年齢を回答させた。

## 3. 結果と考察

### 1) 個人差要因の基礎統計量

Table 1に各個人差要因の平均値と標準偏差を示す。それぞれについて、性別を独立変数とする1要因の分散分析を行ったところ、男性性について有意な主効果(男性>女性:F(1,234)=4.697 p<.05)がみられ、公的自意識についても有意な主効果(男性<女性:F(1,234)=8.450 p<.01)がみられた。すなわち、男性は女性よりも男性性が高く、公的自意識が低いことがわかった。

Table 1 個人差要因の基礎統計量と男女差(分散分析:F値と有意水準)

	男性		女性		性差	
	平均値	SD	平均値	SD	F値	有意水準
社会的スキル	3.13	0.64	3.06	0.48	1.04	
男性性	3.27	0.66	3.09	0.59	4.70	*
女性性	3.43	0.61	3.47	0.51	0.22	
公的自意識	3.48	0.71	3.73	0.59	8.45	**
私的自意識	3.40	0.60	3.52	0.60	2.43	
内的他者意識	3.33	0.82	3.40	0.74	0.55	
外的他者意識	3.18	0.93	3.32	0.72	1.84	
空想的他者意識	3.26	0.96	3.20	0.95	0.25	

\*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

### 2) 化粧意識と個人差要因との相関関係

化粧意識と個人差要因との関連性をみるために、相関分析を行った。第3報で化粧意識に顕著な男女差があることが明らかとなったため、より詳しく内容を検討するため男女別に相関分析を行った(Table 2)。

男性では、『魅力向上・気分高揚』が外的他者意識と0.1%水準の、内的他者意識や空想的他者意識と1%水準の、『必需品・身だしなみ』が外的他者意識と1%水準の、内的他者意識や空想的他者意識と5%水準の有意な正の相関を示した。そのうち、相対的に高い相関係数を示した組合せは『魅力向上・気分高揚』と外的他者意識、『必需品・身だしなみ』と外的他者意識であった。他方、女性では、『魅力向上・気分高揚』が公的自意識や外的他者意識と0.1%水準の、女性性や私的自意識と1%水準の、社会的スキルや内的他者意識と5%水準の、『必需品・身だしなみ』が外的他者意識と0.1%水準の、公的自意識と1%水準の有意な

Table 2 化粧意識と個人差要因の相関 (男女別)

	男性化粧意識			女性化粧意識		
	『魅力向上・気分高揚』	『必需品・身だしなみ』	『効果不安』	『魅力向上・気分高揚』	『必需品・身だしなみ』	『効果不安』
社会的スキル	0.17	0.08	-0.10	0.18 *	0.09	0.06
男性性	0.17	0.15	-0.08	0.12	0.07	-0.02
女性性	0.14	0.06	-0.14	0.20 **	0.06	0.11
公的自意識	0.13	0.16	-0.04	0.33 ***	0.20 **	0.10
私的自意識	0.09	0.12	-0.14	0.19 **	0.04	-0.01
内的他者意識	0.25 **	0.21 *	-0.13	0.18 *	0.03	0.00
外的他者意識	0.32 ***	0.27 **	0.01	0.30 ***	0.29 ***	0.14
空想的他者意識	0.23 **	0.23 *	-0.16	0.14	0.10	0.07

\*\*\*p&lt;.001, \*\*p&lt;.01, \*p&lt;.05

正の相関を示した。そのうち、相対的に高い相関係数を示した組合せは、『魅力向上・気分高揚』と公的自意識、『必需品・身だしなみ』と外的他者意識であった。『効果不安』においては男女とも有意な相関を示した個人差要因はみられなかった。

以上の結果から、男性は、他者の内面や外面や空想的イメージを意識する程度の高い者ほど『魅力向上・気分高揚』『必需品・身だしなみ』についての意識も高い傾向にあることがわかった。特に、他者の外面を意識する程度の高い者ほど『魅力向上・気分高揚』『必需品・身だしなみ』を意識する傾向にあることがわかった。外的他者意識や内的他者意識における他者とは現前する他者であることから、同性や異性の友人などの他者に対する外面への意識と他者が自己についてどのように考えているのかという内面への意識が化粧意識に関連していると推測される。その理由として、文化的に女性に対しては化粧や体形などの外面への美しさが期待され、男性に対しては「顔ではなく心」という言葉に代表されるように内面への美しさが期待される傾向にあった<sup>11)</sup>。そのため、他者の外面を気にすることはよくないとする男性における従来の価値観が、他者意識における内的他者意識としてあらわれたのではないかと推測される。また、空想的他者意識とは現前しない他者イメージへの意識であることから、男性の化粧意識は化粧によって作り上げる理想の自己像などへの意識が化粧意識に関係すると推測される。

男性の場合、男性向けファッション誌などで美容情報を手に入れやすくなってはいるものの、女性に比べその情報量は少なく、実際に化粧を行う男性もまだまだ少ない。そのため、男性化粧における具体的モデルとして他者を参考にすることが難しく、化粧後の自己像がモデルとして意識され、空想的他者意識としてあらわれたのではないかと推測される。

他方、女性は、対人関係を円滑に行うスキルの高い者、女性性の高い者、人からみられる自己を意識する程度の高い者、自己の内面を意識する程度の高い者、他者の内面や外面を意識する程度が高い者ほど『魅力向上・気分高揚』についての意識も高い傾向にあり、人からみられる自己を意識する程度や他者の外面を意識する程度が高い者ほど『必需品・身だしなみ』の意識についても高い傾向にあることがわかった。特に、人からみられる自己を意識する程度の高い者ほど『魅力向上・気分高揚』を意識し、他者の外面を意識する程度の高い者ほど『必需品・身だしなみ』を意識する傾向にあることがわかった。外的他者意識や内的他者意識における他者とは現前する他者であることから、男性同様、同性や異性の友人などの他者に対する外面への意識と他者が自己についてどのように考えているのかという内面への意識が化粧意識に関連していると推測される。しかしながらその理由は男性とは異なり、女性は内面より外面が期待される傾向にあるため<sup>12)</sup>、自己の化粧や被服について他者がどのように考えているかを気

にする意識が内的他者意識としてあらわれたのではないかと推測される。大坊<sup>2)</sup>は、対人関係が円滑な者ほど化粧をよく行うことを明らかにしているが、化粧意識においても女性は対人関係が円滑な者ほど『魅力向上・気分高揚』を意識する傾向が高いことが明らかとなった。すなわち、対人関係が円滑な者は化粧を利用することにより自己の魅力や気分を高め、より対人関係を円滑に行おうとする傾向があるのではと推測される。また、笹山・永松<sup>1)</sup>は抽出した女性の「必需品としての化粧」という対他的な意識と女性性とのあいだに正の関連を明らかにしているが、本報では『魅力向上・気分高揚』という対自的な意識と正の関連が明らかとなった。その理由として、今日において化粧行動が必ずしも対他的に女性の必需品として期待されてはならず<sup>13)</sup>、化粧の楽しみや心身への効果という化粧への対自的な意識と女性性が関係しているためと推測される。

### 3) 化粧意識を規定する個人差要因

次に、化粧意識が個人差要因によっていかに異なるかを検討するため、被調査者を男女別に各個人差要因の評定点の中央値に基づき高群と低群に分けた。そして、化粧意識それぞれの因子の評定平均値を従属変数とし、社会的スキルは1要因の、性役割は2要因の、自意識は2要因の、他者意識は3要因のそれぞれに基づく高低の2群を独立変数とする分散分析を行った。Table 3に個人差要因別平均値と標準偏差、Table 4に化粧意識の個人差要因による差異に関する分散分析結果(F値と有意水準)を示す。

男性では、有意な主効果がみられた組合せのうち、『魅力向上・気分高揚』において、内的他者意識や外的他者意識と1%水準の有意な主効果がみられた。すなわち、内的他者意識や外的他者意識の高群は低群に比べ『魅力向上・気分高揚』を一層意識していることがわかった。『必需品・身だしなみ』において、内的他者意識と1%水準の、外的他者意識と5%水準の有意な主効果がみられた。すなわち、内的他者意識や外的他者意識の高群は低群に比べ『必需品・身だしなみ』を一層意識していることがわかった。さらに、内的他者意識と外的他者意識

との交互作用は『必需品・身だしなみ』において1%水準で有意であった( $F(1,104)=7.583$   $p<.01$ )。下位検定の結果、内的他者意識と外的他者意識がともに高群はその他の組合せ群に比べ『必需品・身だしなみ』を一層意識していることがわかった。

他方、女性では有意な主効果がみられた組合せのうち、『魅力向上・気分高揚』において、外的他者意識と0.1%水準の、女性性、公的自意識、内的他者意識、空想的他者意識と1%水準の、私的自意識と5%水準の有意な主効果がみられた。すなわち、女性性、公的自意識、私的自意識、内的他者意識、外的他者意識、空想的他者意識の高群は低群に比べ『魅力向上・気分高揚』を一層意識していることがわかった。また『必需品・身だしなみ』において、外的他者意識と0.1%水準の有意な主効果がみられた。すなわち、外的他者意識の高群は低群に比べ『必需品・身だしなみ』を一層意識していることがわかった。男性性と女性性との交互作用は『必需品・身だしなみ』において1%水準で有意であった( $F(3,178)=3.446$   $p<.01$ )。下位検定の結果、男性性と女性性のともに高群は男性性が高く女性性が低い群や男性性が低く女性性が高い群に比べ『必需品・身だしなみ』を一層意識していることがわかった。さらに『効果不安』について、外的他者意識と5%水準の有意な主効果がみられた。すなわち、外的他者意識の高群は低群に比べ『効果不安』を一層意識していることがわかった。外的他者意識と空想的他者意識との交互作用は『効果不安』において5%水準で有意であった( $F(1,174)=6.060$   $p<.05$ )。下位検定の結果、外的他者意識と空想的他者意識のともに高群は他の組合せ群に比べ『効果不安』を一層意識していることがわかった。

化粧意識を規定する個人差要因を明らかにするため、男女別に化粧意識の3因子それぞれを目的変数とし、個人差要因を説明変数とする重回帰分析を行った(Table 5)。

男性の『魅力向上・気分高揚』を規定する要因として外的他者意識が1%水準の正の有意な標準偏回帰係数を示した。女性の『魅力向上・気分高揚』を規定する要因として公的自意識や

Table 3 化粧意識の平均値と標準偏差 (男女別, 個人差要因別)

		男性化粧意識						女性化粧意識					
		『魅力向上・ 気分高揚』		『必需品・ 身だしなみ』		『効果不安』		『魅力向上・ 気分高揚』		『必需品・ 身だしなみ』		『効果不安』	
		平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
社会的スキル	低	2.13	0.96	2.01	0.78	3.20	1.04	3.51	0.71	2.76	0.92	3.51	0.68
	高	2.32	1.08	2.01	0.89	3.14	1.10	3.66	0.62	2.89	0.82	3.64	0.59
男性性	低	2.12	0.95	1.96	0.73	3.24	1.03	3.53	0.70	2.76	0.86	3.54	0.63
	高	2.41	1.10	2.15	0.96	2.99	1.14	3.62	0.64	2.90	0.91	3.60	0.66
女性性	低	2.08	0.92	1.99	0.72	3.15	1.02	3.47	0.69	2.79	0.86	3.54	0.62
	高	2.41	1.13	2.04	0.96	3.15	1.13	3.75	0.57	2.93	0.90	3.61	0.64
公的自意識	低	3.45	0.69	2.73	0.86	3.53	0.63	3.41	0.70	2.65	0.83	3.52	0.63
	高	3.73	0.62	2.97	0.87	3.65	0.65	3.74	0.58	2.96	0.88	3.64	0.63
私的自意識	低	2.26	1.02	2.06	0.82	3.29	0.98	3.46	0.70	2.82	0.88	3.64	0.62
	高	2.25	1.05	2.02	0.90	2.91	1.15	3.69	0.61	2.89	0.87	3.56	0.65
内的他者意識	低	1.99	0.90	1.82	0.72	3.13	0.97	3.42	0.75	2.75	0.88	3.55	0.63
	高	2.56	1.10	2.29	0.96	3.11	1.22	3.74	0.55	2.91	0.87	3.61	0.66
外的他者意識	低	2.05	0.96	1.90	0.73	3.10	1.03	3.41	0.69	2.62	0.80	3.47	0.59
	高	2.56	1.07	2.24	1.01	3.15	1.16	3.75	0.61	3.08	0.90	3.69	0.68
空想的他者意識	低	2.18	0.96	1.93	0.79	3.23	1.01	3.44	0.68	2.75	0.84	3.53	0.61
	高	2.32	1.10	2.15	0.92	2.99	1.15	3.71	0.65	2.93	0.92	3.64	0.67

Table 4 化粧意識の個人差 (男女別, 分散分析:F値と有意水準)

	男性化粧意識			女性化粧意識		
	『魅力向上・ 気分高揚』	『必需品・ 身だしなみ』	『効果不安』	『魅力向上・ 気分高揚』	『必需品・ 身だしなみ』	『効果不安』
社会的スキル	0.99	0.00	0.10	2.42	1.06	1.89
男性性	2.16	1.26	1.40	0.78	1.07	0.45
女性性	2.99	0.11	0.00	8.37 **	1.31	0.55
男性性×女性性	0.21	0.39	1.44	3.73	6.23 **	2.77
公的自意識	0.09	0.10	0.25	8.32 **	3.60	1.78
私的自意識	0.00	0.07	3.62	5.98 *	0.27	0.74
公的自意識×私的自意識	0.22	0.18	2.37	0.00	0.33	1.23
内的他者意識	9.29 **	9.07 **	0.01	10.69 **	1.61	0.52
外的他者意識	6.91 **	4.50 *	0.06	12.69 ***	14.02 ***	5.44 *
空想的他者意識	0.58	1.76	1.46	7.97 **	1.95	1.40
内的他者意識×外的他者意識	0.18	7.59 **	1.02	0.00	2.02	0.09
内的他者意識×空想的他者意識	1.81	0.30	0.88	0.16	0.79	0.66
外的他者意識×空想的他者意識	0.68	0.00	1.84	0.27	0.16	6.06 *
内的他者意識×外的他者意識× 空想的他者意識	0.18	0.05	1.56	2.33	0.71	1.01

\*\*\*p&lt;.001, \*\*p&lt;.01, \*p&lt;.05

外的他者意識が5%水準の正の有意な標準偏回帰係数を示し、『必需品・身だしなみ』を規定する要因として外的他者意識が1%水準の有意な正の標準偏回帰係数を示した。

以上の結果から、部分的ではあるが男性の化粧意識には外的他者意識が、女性の化粧意識に

は公的自意識と外的他者意識が関連することがわかった。すなわち、男性では、他者が行っている化粧行動など他者の外面への意識が『魅力向上・気分高揚』に関連することがわかった。他方、女性では、他者が行っている化粧行動など他者の外面への意識が『必需品・身だしな

Table5 化粧意識と個人差要因の重回帰分析結果 (男女別, 標準偏回帰係数と決定係数)

	男性化粧意識			女性化粧意識		
	『魅力向上・気分高揚』	『必需品・身だしなみ』	『効果不安』	『魅力向上・気分高揚』	『必需品・身だしなみ』	『効果不安』
社会的スキル	0.14	0.04	-0.02	0.02	0.10	0.09
男性性	-0.10	0.07	0.01	0.03	0.00	-0.05
女性性	0.04	-0.11	-0.09	0.17	0.03	0.07
公的自意識	-0.23	-0.09	0.16	0.25 *	0.08	0.07
私的自意識	-0.06	0.02	-0.06	0.09	-0.02	-0.10
内的他者意識	0.23	0.13	-0.05	-0.16	-0.18	-0.01
外的他者意識	0.42 **	0.26	0.04	0.22 *	0.31 **	0.16
空想的他者意識	0.00	0.03	-0.20	-0.02	0.06	0.00
決定係数(R2乗)	0.17 **	0.08	0.07	0.21 ***	0.15 **	0.05

\*\*\*p&lt;.001, \*\*p&lt;.01, \*p&lt;.05

み』に関連し、『魅力向上・気分高揚』には他者の外面への意識だけではなく自己が他者からみられているという意識も関連することがわかった。

#### 4. まとめ

1) 化粧意識と個人差要因との相関関係を検討した結果, 男女とも他者の外面を意識する程度が高い者ほど『魅力向上・気分高揚』『必需品・身だしなみ』を意識する傾向のあることがわかった。また, 男性では, 他者の内面や空想的イメージを意識する程度の高い者ほど『魅力向上・気分高揚』『必需品・身だしなみ』を意識する傾向のあることがわかった。すなわち, 男性の『魅力向上・気分高揚』『必需品・身だしなみ』は他者の外面だけでなく他者の内面への意識とも関連することがわかった。他方, 女性では, 対人関係処理スキルの高い者, 女性性の高い者, 自己や他者の内面を意識する程度が高い者ほど『魅力向上・気分高揚』を意識する傾向が, 人からみられる自己を意識する程度が高い者ほど『魅力向上・気分高揚』『必需品・身だしなみ』を意識する傾向のあることがわかった。すなわち, 女性の『魅力向上・気分高揚』『必需品・身だしなみ』は他者からみられる自己と他者の外面への意識と関係し, 自己と他者の外面への意識と関連することがわかった。

2) 化粧意識と個人差要因との関係性を検討し

た結果, 男性では『魅力向上・気分高揚』『必需品・身だしなみ』において内的他者意識と外的他者意識の有意な主効果がみられたことから, 概して他者の内面や外面を意識する程度の高い者ほど『魅力向上・気分高揚』『必需品・身だしなみ』を一層意識することがわかった。他方, 女性では『魅力向上・気分高揚』『必需品・身だしなみ』『効果不安』において外的他者意識の有意な主効果がみられたことから, 概して他者の外面を意識する程度の高い者ほど『魅力向上・気分高揚』『必需品・身だしなみ』『効果不安』を一層意識することがわかった。また『魅力向上・気分高揚』において女性性, 公的自意識, 私的自意識, 内的他者意識, 空想的他者意識の有意な主効果がみられたことから, 概して女性性の高い者, 他者からみられる自己を意識する程度の高い者, 自己の内面を意識する程度の高い者, 他者の内面や空想的イメージを意識する程度の高い者ほど『魅力向上・気分高揚』を一層意識することがわかった。

3) 化粧意識を規定する個人差要因を重回帰分析により検討した結果, 男性の『魅力向上・気分高揚』を規定する要因は外的他者意識であり, 女性の『魅力向上・気分高揚』を規定する要因は公的自意識と外的他者意識, 女性の『必需品・身だしなみ』を規定する要因は外的他者意識であることがわかった。すなわち, 男性は他者の外面への意識が化粧意識に影響を与え,

女性は他者の外面への意識だけではなく他者からみられる自己への意識が化粧意識に影響を与えることがわかった。

本報では、化粧意識と社会的スキル、性役割、自意識、他者意識との関連性について検討を行った。従来、化粧や被服などに関連づけて他者意識を扱った研究は少ない。そのようななか、男女とも他者の外面への意識が化粧意識を規定していることがわかった。すなわち、外的他者意識における他者とは現前する他者であることから、男女とも同性や異性の友人などの化粧や被服という外面への意識が化粧意識を規定していると推測される。また、女性の化粧意識は公的自意識によっても規定されることが明らかとなった。すなわち、第1報<sup>14)</sup>で女性は男性からの化粧期待が高いことが明らかにされていることから、期待された化粧状態を男性からみられるという意識が化粧意識に関連すると推測される。しかしながら、一般的に他者の前で化粧を行うことをよしとされない<sup>15)</sup>なか、今日、駅など公共の場で化粧を行う若い女性達が増えている。すなわち、期待された化粧状態だけではなく素顔状態から化粧状態に変容する過程をも女性は男性にみられており、他者からみられるという意識は化粧意識や行動だけではなく化粧規範などにも関連し影響を与えていると推測される。

今後の課題として、多様なサンプルを対象とする知見の一般性の吟味や、えられた知見をも

とに化粧に関する規範意識などとの関連についても検討を行いたい。

#### 引用・参考文献

- 1) 笹山郁生・永松重矢, 福岡教育大学紀要, 48(4), 241-251 (1999)
- 2) 大坊郁夫, 日本グループダイナミクス学会第39回大会発表論集, 115-116 (1991)
- 3) 松井豊, 自分の性格と他人の性格, プレーン出版, 55-66(1986)
- 4) 平松隆円・牛田聡子, 織消誌, 44(11), 69-75 (2003)
- 6) 菊地章夫, 思いやりを科学する, 川島書店 (1988)
- 7) 東清和, 早稲田大学教育学部学術研究, 39, 25-26 (1990)
- 8) 東清和, 早稲田大学教育学部学術研究, 40, 61-71 (1991)
- 9) 菅原健介, 心理学研究, 55,184-188 (1984)
- 10) 辻平治郎, 自己意識と他者意識, 北大路書房 (1993)
- 11) 高木修(監), 化粧行動の社会心理学, 北大路書房, 64-75 (2001)
- 12) ポーラ文化研究所, 化粧文化, 55-66 (1998)
- 13) 高木修(監), 化粧行動の社会心理学, 47-63 (2001)
- 14) 平松隆円・牛田聡子, 織消誌, 44(11),58-68 (2003)
- 15) 高木修(監), 化粧行動の社会心理学, 北大路書房, 48-62 (2001)